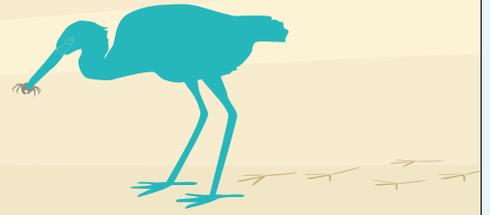


なぎさ NEWS



ウィーディシードラゴンも私たちが食べている東京湾の生き物

表紙や「SEA LIFE TOPICS」で紹介したウィーディシードラゴンは、細長い口に入る小さな生き物をエサとしており、水族園ではイサザアミのなかまを与えています。タイミングが合えば、ウィーディシードラゴンの水槽の中を泳ぐ、大きさ1cmほどの透明なエビのような生き物が見つかるかもしれません。

イサザアミのなかまは日本各地の内湾・汽水域に生息しており、葛西海浜公園「西なぎさ」で定期的に行っている地曳網調査では、ニホンイサザアミとイサザアミの2種が確認されています。これを育成中のウィーディシードラゴンのエサとするため、昨年11月には「西なぎさ」で採集も行いました。

一年を通して「西なぎさ」で見られるイサザアミ類ですが、個体数は季節によって異なり、時には地曳網がイサザアミでいっぱいになることも。イサザアミ類は小型の魚類など動物プランクトンを食べる生き物を支える重要なエサとなっています。実は私たち日本人も佃煮にして昔から食べてきました。同じものを食べていると思うと、海の中の生き物をぐっと身近に感じられますね。(調査係 宮崎 寧子)



網いばいに採れたイサザアミ類(左)と拡大写真(右)

「西なぎさ」にいるクラゲ“じゃない”生き物

「西なぎさ」で行っている干潟の生き物調査では、波打ち際に漂着する生き物についての調査も欠かせません。漂着生物を調べることで、「西なぎさ」の沖合に生息する生き物を推測することができます。

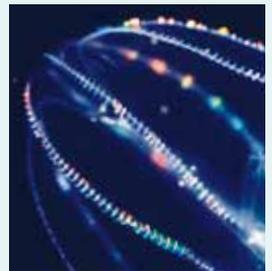
今回は「西なぎさ」に漂着する生き物の中で、クシクラゲ類について紹介します。クシクラゲ類は、いわゆるクラゲ類(刺胞動物)と同じような姿をしていますが、有櫛動物という全く異なるグループに属しています。その特徴の一つは、細かい毛が櫛の歯のようにならんだ櫛板を体表にもつことです。この櫛板を波打たせるようにして動かすことで、水中を泳ぐとき櫛板に光が反射して、構造色と呼ばれる虹色の輝きを放ちます。

「西なぎさ」では、冬になるとカブトクラゲやウリクラゲといったクシクラゲ類が波打ち際に漂着することがあります。クシクラゲ類の体はとても柔らかいので、形がよく分からないゼリー状の透明な塊になってしまっているかもしれませんが、生きていたときにはとても美しい生き物です。クラゲとつくけどクラゲ“じゃない”クシクラゲ類。常時ではありませんが、水族園でも「浮遊生物」コーナーで展示していることがありますので、ご興味のある方はズーネットなどで確認の上、ご来園ください。

(教育普及係 田中 隼人)



漂着したクシクラゲ類



水中を泳ぐカブトクラゲの全身(左)と櫛板(右)

なぎさ 生き物ミニ情報

水族園では葛西海浜公園の「西なぎさ」で、さまざまな調査を行っています。今回は、12月に行った地曳網調査と1月に行った生き物調査の結果をまとめて報告します。

12月地曳網調査: 水温12.5℃、気温13.5℃。天気はくもり。例年、冬の地曳網調査は入網する生き物の種類・数ともに少ないのが特徴です。今回もやはり生き物の少ない結果となりました。そんな中でも、周年見られるエドハゼやアシシロハゼは採集されています。

1月生き物調査: 水温11.8℃、気温7.1℃。天気はくもり。オオバンや、冬になるとやってくるカムリカイツブリなどの渡り鳥を見ることができました。また、干潟では漂着したミズクラゲにたくさんのアラムシロガイが群がっていました。